

こんにちは。妻です。

長い冬休み(我が家にとっては民宿繁忙期)がおわり、3月からは、いよいよ農作業シーズンとなります。

えづらファームでは、地域の方はもちろんですが、住込みボランティアを受け入れていて、共に暮らし、働き、力強い戦力となってくれています。

さあ、いよいよ、明日からボランティアメンバーがやってきます。

そして、その後入れ替わりで、11月上旬までは常に誰かがボランティアとして滞在することになります。

2019年の受け入れを前に、私たちがボランティアを受け入れている理由や、これまでのこと、これからのことなどをまとめてみたいと思います。

もっと詳しく。住込みボランティアって?

住込みボランティアとは、その名の通り、えづらファームの住宅に私たちと共に暮らして、通常の農作業をしてもらうメンバーたちのこと。1日8時間、通常の農作業をしてもらう代わりに、宿泊、3度の食事、おやつ、様々な体験を無料で提供しています。

食事は、採れたて野菜たっぷり!滞在期間は、基本的には1週間~2か月ほど。

同じ時期の滞在人数は、農繁期で4~6名。忙しくない時期で2~3名。

農作業は体力的にキツイものですし、長期の休みが必要&ボランティアという特性上、応募してくれる方のほとんどが大学生や、20代の社会人です。新規就農を目指しているといった30代以上の方もいらっしゃいます。1番多いのは日本人の大学生ですが、3割は海外から。男女比は男:女=1:9といったところでしょうか。

…ガールズパワー!!!

農業に従事したい!というよりも「田舎暮らしに興味がある」「様々な体験をしたい」「就職活動の前に色々な職業を見たい」といったような、職業体験&留学といった感覚で来る方が多い印象です。2018年の受入れ人数は合計70名でした。

ありがたいことに、昨年は約200名の応募がありましたので、そのうち約1/3を受け入れたということになります。

ボランティア受け入れの歴史今となっては、たくさんの方が来てくれていますが、もちろん、初めから今のようなかたちになった訳ではなく、「農業における人手不足」は、我が家にも大きくのしかかった課題でした。

2012年 独立の年 ボランティア0人

畑作農業は、管理作業はそんなに人手はいりませんが、植え付けと収穫の農繁期にのみ、5名ほどの人手が必要になります。

農家になったばかりの私たちにとって、5名ほど働きに来てもらうのは本当に大変なこと。

それでも、先代のオーナーが「江面さんのところを助けに行ってあげて」と地域の方にお願いしてくださったおかげで、農繁期には、近所の方々が何人か働きに来てくれました。

そして、それでも人数が足りない時は「働きに来てもらえませんか?」と手土産をもって地域の農作業経験者の方の家をまわりました。

農作業では、私たちがベテランの地域の方々に怒られることも。

私も、じゃがいものハーベスターのオペレーションを「下下手くそー！」と怒鳴られたり(笑)夫の機械操作と私の操作がかみ合わず、作物をたくさん落とした時は「夫婦でしっかり力合わせんかー！！！」とみなさんから叱咤激励されました(笑)あぶなっかしい経営者だったのだと思います。

けれど、グニヤグニヤに曲がりながらも必死に進む夫のトラクターを見ながら「がんばる奴アイサね」(北海道弁)と地域の方が話していたのをこっそり聞いてしまった時は、泣きそうになったのを憶えています。2012年の5月に娘が生まれ、育児が大変な中の人手不足。

と地域の方が話していたのをこっそり聞いてしまった時は、泣きそうになったのを憶えています。

2012年の5月に娘が生まれ、育児が大変な中の人手不足。

当然、オーナーである私も畑にでる必要がありました。

義両親が娘を見に車で3時間かけ来てくれたり、近所のご家庭に赤ちゃんの娘を預けることも(笑)

今でも、「お前、赤ちゃんの時はうちに来てたんだよー」と声をかけてもらい、娘はキヨトンとしています。

おんぶして働くこともありました。せっかく勤め上げ、定年をむかえるにも関わらず、息子夫婦が予想外の「農家」になり、農作業を手伝うことに！

まさかの農作業定年後デビュー！は、”新規就農者の親あるある”だそうですね。

こんなふうに、就農1年目は、ギリギリ、無理しまくり、ハラハラドキドキの経営でした。

お世話になった方々には感謝してもしきれず。

「あなたがいるから今の私がある」というありふれた言葉も、心から理解できます。

そして同時に、農業の人手確保の大変さを思い知らされました。

過疎化がどんどん進むこの地であと何十年も農業をするなら、地域の方や義両親に甘えていては先がないのではないか。

私たちだけでなく、地域全体が人手不足になり、この地域で農業を続けるのが困難になるだろう。

そう危機感をもち、人がいないなら、他から来てもらう必要がある…と感じたのでした。

2013年 はじめての学生バイト受け入れ

北海道大学のゼミがフィールドワークの一環として我が家に視察に来てくれたとき、学生の1人に「インターンシップは受け入れてないんですか？」と声をかけられました。

「受け入れるなら来る？」と聞くと「もちろんです！」とのこと。

また、東京農業大学で講師を頼まれたとき「アルバイト募集中！」と伝えると1名の応募がありました。

住込みアルバイトに興味のある学生はいそだ！と確信。

この年は、北大の学生、東京農大の学生、その友人数名に住込みに来てもらい、働いてもらうことになりました。この時は、まさかボランティアで来てくれるとは思わず、しっかりとしたお給料を払わせてもらったので、人件費の都合上、少人数の受け入れしかできませんでした。

初めて会う方と一緒に暮らす…それが一番の心配でしたが、わざわざ農家に住込みで来てくれる学生は頑張り屋さんで良い方ばかりで、戸惑いもありながらも、楽しく暮らし働くことができました。

義両親は、農繁期はやっぱり家事や子守りに来てくれましたので、私も目いっぱい働くことができました。

また、地域の方には、無理にお願いして来てもらう必要はなくなり、行くよ、と言ってくれた方のみに来ていただくことができました。

2014年 本格的に受け入れ開始！

学生をもっともっと受け入れよう！と決めた私たち。

大人数に正規のお給料を支払って来てもらうのは難しいため、お給料は半額だけど、宿泊食事おやつが無料だよ！と「ボラバイト」に変え、たくさんの学生に来てもらうことにしました。

前年來てくれた北大生に相談したところ、彼自身もことあるごとに働きに來てくれた上に、札幌の学生を合計10名以上紹介してくれたのです。

そう、彼は、北大のイベントの実行委員長をつとめるほど、THE人脈ある学生だったのです。

彼は本当に頑張ってくれました。校内や校外で「ファームステイ興味ない？」と声をかけている目撃情報が数人から寄せられているぐらいです(笑)どうしてそこまでして協力してくれたのか…ちゃんと聞いたことはありませんが、自分の一言がきっかけになり始めた受け入れを発展させることに、喜びを感じてくれたのかもしれません。

そして、1度來てくれた方に「人が足りないの！誰かいないかな？」と懇願し、この年は合計15名のボラバイトを受け入れることになりました。

北大生の彼が築いてくれた基盤、そこから発展した札幌の大学生とのつながりは、今もなお続いているます。

このように、1人の学生の大きな助けによって実現したボラバイト集めでしたが、大人数で食卓を囲み、働き、ひといきついたら一緒に遊びにでかける…。

人との出会いが少ない農村の暮らしにちょっと寂しさを感じていた私たちにとって、目をキラキラさせた学生たちとの出会い、そして交流は、純粋に楽しいことだと感じられました。

また、來てくれた方が、単なるバイトではなく貴重な経験ができる場としてえづらファームに滞在してくれることにも驚きました。

2歳になった娘が「おにいたん！」「おねえたん！」とたくさんの学生に可愛がってもらっている姿も、想いに拍車をかけました。

ボラバイトの受入れは、いける！！

人手不足の解消はもちろんだけど、きっと、お互いにとって、それ以上の価値がある。

そして、私たちは、人の受入れを楽しむことができる性格のようだ。

たくさんの人に他の地域から来てもらう「人の集まる農場」

我が家はこれでやっていこう！！！

そう確信した1年だったのです。

2015年 ホームページ開設

この年は、受け入れ人数がぐっと増え、ボラバイトを50名ほど受け入れることができました。

引き続き北大生も学生を紹介してくれ、また1度來てくれた方の紹介も多かったのですが、この年にボラバイトの応募を助ける大きな変化がありました。

農家民宿の開始と、それに伴う農場のホームページの開設です。

キレイな客室を完成させ、ボラバイトにもそこに泊まってもらえるようになりました。

そして、HPにボラバイトの募集を掲載。日々の仕事や部屋の様子などが詳しく見れるようになり、HPを見ての応募者がぐっと増えたのです。

この頃から、学生だけでなく、社会人も応募してくれるようになりました。

人に勧められたからではなく、自ら調べ、連絡をとり来てくれる。そんなボラバイトがここで得る経験の重みを、この年は強く感じることになりました。

専門大学を休学して4か月滞在してくれたあと、農の世界に進みたいと、大学を中退し、農家と深いつながりのある飲食店で働き始めたメンバーもいます。

ここでの経験を卒業論文の題材にしたメンバーも3名いました。

就職活動前にボラバイトを経験したこと、単純に大手に就職したい、という気持ちがなくなり、将来自分の力で仕事ができるようなスキルの身につく会社を選んだ、というメンバーもいました。

美しい自然を見ていたり、他のボラバイトとのおしゃべりが楽しくて、スマホ依存症がなおった！というメンバーもいました。

お給料がほしいなら、都市のコンビニなどで働くと思います。

ここまでわざわざ来てくれる方たちは、給料など望んでいない、むしろ、それに代えられない人生に役立つ経験を求めていると理解することができました。

そして、翌年は完全に「ボランティア」で人を募集してみることになりました。

2016年 ボランティアとしての受入れに変更 海外からの申込み 他農園への派遣も

えづらファームの民宿が軌道に乗り始め、海外からも人を受け入れる為、英語のHPを作りました。それにより、海外からのボランティアの申込も急増したのです。農家でボランティアを受け入れていて、英語のHPをもっているところが日本にほとんどないため「Farmstay」「Hokkaido」と検索すると、我が家のHPが1番上に来るとのこと。

えづらファームが良いというより、他に選択肢がないので、必然的にたくさんの外国の方々が来てくれるようになりました。

また、海外の方にはワーキングビザなしにお給料を支払えない為、ボランティアの受入れに変更して、正解だったと思いました。

さらに、この年から、農繁期に我が家ボランティアに他の農園でも働いてもらうようになりました。

派遣先の農家さんは、ほんの数日ではあるのですが、とても助かったと喜んでくれました。

もともと、えづらファームだけでなく、地域自体の人手不足も解消できればという想いではじめた受け入れです。

今後、この動きがもっと波にのっていけばと思っています。

2017年 応募者が受入れ人数より多くなる それゆえの課題も

ホームページの閲覧数も増え、農場ボランティアでネット検索すると、えづらファームが上位にくるようになりました。

来てくれた方の紹介も、自然とつながるように。

この年はじめて、ありがたいことに、応募者が受け入れ人数を上回るようになりました。

全員を受け入れたい気持ちですが、部屋数や仕事内容から考えても、それはいかないので、基本的には先着で受け入れさせていただくことに。

働きにきてくださいと、地域の家をまわった日が嘘のような出来事です。

でも、HPから直接の申込みが増えることで、贅沢な悩みではあるのですが、新たな課題も出てきました。

ホームページなどで「楽しそう」「農業はすばらしい」といったイメージを強く打ち出しすぎたのかもしれません。

田舎でゆっくりするためにボランティアに参加したのに、こんなに農作業がハードだと思わなかた…と、期待との違いに戸惑う方も現れたのです。

働く時間を短くしてほしい、あまり力を使わない仕事をさせてほしい等と、今までにはなかったお願ひをされることも。

そして、この年はじめて、途中で帰る「リタイア」を1名出してしまいました。

この年はじめて、ありがたいことに、応募者が受け入れ人数を上回るようになりました。全員を受け入れたい気持ちですが、部屋数や仕事内容から考えても、そうはいかないので、基本的には先着で受け入れさせていただくことに。
働きにきてくださいと、地域の家をまわった日が嘘のような出来事です。
でも、HPから直接の申込みが増えすることで、贅沢な悩みではあるのですが、新たな課題も出てきました。
ホームページなどで「楽しそう」「農業はすばらしい」といったイメージを強く打ち出しすぎたのかもしれません。
田舎でゆっくりするためにボランティアに参加したのに、こんなに農作業がハードだと思わなかた…と、期待との違いに戸惑う方も現れたのです。
働く時間を短くしてほしい、あまり力を使わない仕事をさせてほしい等と、今までにはなかったお願ひをされることも。
そして、この年はじめて、途中で帰る「リタイア」を1名出してしまいました。
2018年 応募人数が200人に ボランティアをきっかけに遠軽町に2名が移住

2018年は本当に嬉しい年でした。
2013年にはじめてボランティアに来てくれた学生が、社会人経験を積んだ後、えづらファームで従業員として働きたいと言ってくれたのです。彼女は遠軽町白滝に移住してきて、今も従業員として頑張ってくれています。そして、ボランティアに2回来てくれた社会人の女性が、遠軽町の地域おこし協力隊として移住してきました。

はじめは、農場の人手不足解消のために始めた受入れでしたが、その枠を越え、町への移住につながる動きが出てきたのです。
この年は、飛躍的に応募者が増え、合計200名を越えました。
選考はさせていただきましたが、1人でも多くの方に来てもらいたくて、受け入れ人数を増やして70名を受け入れました。
それが実現した理由は2つ。
1つは、ボランティアメンバーが物置だった部屋をリフォームしてくれ、部屋が1つ増えたこと。そして、従業員として移住しててくれた子に、ボランティアの農作業指導を任し、私の負担が減ったことです。

従業員が1人来てくれたことで、前線で農作業をした上で食事も作っていた頃では考えられない、精神的、身体的なゆとりを得ることができるようになり、より多くのボランティアを受け入れられるようになりました。
また、選考を始めたことで、ミスマッチはだいぶん減り、充実した時間を過ごしてくれる方も増えました。
でも、この年も、2名のリタイアを出てしまいました。
来年はリタイアが出ないように事前の選考と滞在中のケアをちゃんとしていきたいと思いますが、どうしても続いてしまう課題かもしれません…。
そして何より、1/3の方しか受け入れられなかつたのは残念です。
1人との出会いがえづらファームや地域に多くの良い影響を与えてくれていることを考えると、もっと受け入れられていたら、もっともっと何かが起こっていたかもしれない…と思うのです。
2019年は、何とかして更に受け入れ人数を増やしたいと思っているのですが、この話は最後にしたいと思います。

受け入れにあたって、大切にしていること

「ボランティアだから、人件費がかからなくていいね」

とか、また逆に、

「住込みさせるのは大変だから、人件費がかかっても、地域の人を雇ったほうがいいんじゃない？」などと、時々言われます。

だけど、私たちは、人件費削減の為に、ボランティアを受け入れている訳ではないんです…。

むしろ、コストのことを考えると、1シーズンずっとボランティアを受け入れるよりも、必要な農繁期のみベテランの方々に働いていただく方が良いかもしれません

前提はもちろん「先を見据えた、農場の人手不足の解消のため」であり、働き手として多いに期待しています。

今や、農場にとってボランティアの労働力はなくてはならない存在です。

だけど、ボランティアで受け入れをしているのは、「金銭には代えられない価値を、1人でも多くの方と分かち合うため」なのです。

なので、ボランティア1人ひとりが希望する、ここで経験したいことを、できるだけ叶えたいと思っています。

「滞在中、何かしてみたいことがある？？」と、夫も私も必ず声をかけるようにしています。

「星空を見たい」「花火がしてみたい」(今は自由にできる場所が少ないそうですね)「外で食事がしたい」など…。

そんな小さな希望も、できる限り経験してもらいたいのです。

中には「〇〇を作りたい！」と言ってくれることもあります。

例えば、これはピザ窯。ずっと作りたかったけど、そんな余裕はない中、「作ってみたい！」というボランティアメンバーがいたので、デザインから全てお任せしたところ、こんなに素晴らしいピザ窯を作ってくれました。

このピザ窯でのピザ作り体験は、今は人気の民宿のアクティビティとなりました。

庭づくりに興味がある方も多く、例えば「レンガの道」を作ってくれたメンバーもいました。

他にも、

「オリジナルTシャツ」

「えづらファームのイラスト」

など、ボランティアの子が、ここでしかできない経験として、楽しんで取り組んでくれ、えづらファームの一部になったことは数え切れません。

金銭には代えられない価値や経験は人それぞれですが、それを聞き、叶えられる農場であり続けることが、たくさんのボランティアに来てもらう為に必要なのだと思います。

そして、ボランティアのチャレンジの結果が、パッチワークのようにつながり、ひろがり、えづらファームを魅力的な農場にしてくれているのを感じています。

私たちの農場は、ボランティアメンバーによって、つくり上げられてきたものなのです。

そしてそれは、私たちにとっても、金銭で買うことのできない価値なのだと思います。

また、ボランティアメンバーと真剣に向き合い、心を通わせることができれば、彼らは、ここでの体験、農村の暮らし、農業のこと等を、自然と友達などに話してくれ、

その血の通った経験談は、私たちの想いと共に広がっていくのです。

ボランティアと共にあゆむ、えづらファームと地域のこれから。

さて、明日から2019年のボランティアがやってきます。

今年は、すでに2018年よりも応募が多かった為、今まで4~5名ほどの受入れだった「ビートの播種」に、思い切って7名を受け入れることにしました。

母屋の他に、コテージにも滞在してもらう予定です。

従業員も2年目となり、去年以上に現場を任せることができそうですので、私はボランティアの受入れに専念したいと思っています。おそらく、去年以上のメンバーを受け入れができるのではと思います。

そして、これからも変わらず、1人ひとりに貴重な経験を持ちかえってもらいたいと思います。

さらに欲を言えば、その中でたった一握りでも、白滝に移住しててくれる仲間がうまれれば素敵だなあと思っています。

ボランティアをきっかけにここに移住してきて、えづらファームで働くことはもちろん、農業を始めたり、カフェやゲストハウスをオープンする人が出ないかなあ…なんて期待すらしています。

今まで300名近くを受け入れ、移住者が2名ですから、もちろん簡単なことではありません。

でも、それは、「人に来てもらう」という枠が農場から地域に広がっただけなのだと思います。

はじめは人材確保に大苦労していたえづらファームにたくさん的人が来てくれるようになったように、次は地域にたくさんの人々に来てもらいたい。そのための工夫と努力をしていきたい。

人の集まる農場から、人の集まる地域へ。

みんなでつくる農場から、みんなでつくる地域へ。

今までと同じように、多くの方に支えられ、助けてもらい、新たな課題にぶつかりながら、きっと叶えることができるはずだと信じています。

2019年。今シーズンもがんばります。

さあ、明日から。

Farming in 2019 to Begin with Volunteers

Hello. This is my wife.

The long winter vacation (busy season for our family at the guest house) is over, and from March, the farming season will finally begin.

At Ezura Farm, we accept not only local residents but also volunteers who live and work with us, and they have become a powerful asset to our farm.

Tomorrow, the volunteers will start arriving at Ezura Farm.

Then, after that, they will be replaced and someone will always stay as a volunteer until early November.

Before we start accepting volunteers for 2019, I would like to summarize why we are accepting volunteers, what we have done so far, and what we will do in the future.

Learn more. What is a live-in volunteer?

As the name implies, a live-in volunteer is a member who lives with us in the Ezura Farm house and does regular farm work, in exchange for 8 hours a day of regular farm work, lodging, 3 meals, snacks, and a variety of experiences for free.

The meals are full of freshly picked vegetables! The length of stay is basically from one week to two months.

The number of people staying during the same period is 4-6 during the busy farming season. The number of people staying during the same period is 4-6 during the busy farming season, and 2-3 during the less busy season.

Farming is physically demanding and requires long vacations, so most of the applicants are university students or working people in their 20s. The largest number of applicants are Japanese university students, but 30% are from overseas. The male to female ratio is about 1:9. Girls' power!

I want to work in agriculture! The number of students accepted in 2018 was 70 in total.

We are grateful that we received about 200 applicants last year, which means that we accepted about 1/3 of them.

History of Accepting VolunteersThere are many people who come now, but of course, it did not start out this way, and the "labor shortage in agriculture" was a big challenge for our family. 2012, the year of independence, 0 volunteers

Field farming does not require much manpower for administrative work, but only about five people are needed during the busy planting and harvesting seasons.

For those of us who have just become farmers, it is a real challenge to get five people to come to work.

Nevertheless, thanks to the previous owner's request to the community to "go and help Mr. Ezura's place," several neighbors came to work during the busy farming season.

And when we still didn't have enough people, he would ask, "Will you come and work for us?" We went around to the homes of people in the community who had experience working on the farm with gifts.

We were sometimes scolded by the experienced people in the community.

I was even yelled at for operating the potato harvester, "You suck at it! When my husband's operation of the machine and my operation of the machine did not mesh and we lost a lot of

crops, everyone would yell at us, "You and your husband have to work together! (laugh) I guess I was a reckless manager.

I remember I almost cried when I secretly heard a local resident saying, "It's nice to see a man who works hard" (Hokkaido dialect) as he watched my husband's tractor, which was twisting and turning as he struggled to get it going.

My daughter was born in May 2012, and I was short on staff while I was struggling to take care of my child.

Naturally, as the owner, I needed to be out in the field as well.

My in-laws drove 3 hours to see my daughter, and I even had to leave my baby daughter with a neighbor's family (laugh).

Even now, my daughter still looks at me with a scowl when they say, "You used to come over to our house when you were a baby."

I sometimes worked on a piggyback. Even though I had worked hard and was about to retire, my son and his wife unexpectedly became "farmers" and I had to help them with the farm work! Unexpected post-retirement debut as a farmer! This is a common occurrence among parents of new farmers.

So, in the first year of farming, I was on the edge, pushing myself too hard, and feeling the thrill of running a business.

I cannot thank those who helped me enough.

I truly understand the common saying, "I am the person I am today because of you.

At the same time, I realized how difficult it is to secure manpower for farming.

If we are going to farm for many more decades in this area, which is depopulating rapidly, we will not have a future if we are spoiled by the local people and my parents-in-law.

Not only us, but the entire region will be short of labor, and it will be difficult to continue farming in this area.

I felt a sense of crisis, and felt that if there were no people, we needed to get people to come from elsewhere....

2013 First Acceptance of Student Workers

When a seminar from Hokkaido University came to visit our home as part of their fieldwork, one of the students asked us, "Don't you accept interns?" I was asked by one of the students, "Don't you accept interns?

If so, would you come? He replied, "Of course! He said, "Of course!

When I was asked to be a lecturer at Tokyo University of Agriculture, I told them, "We are looking for part-time workers! I received one application.

I was convinced that there might be students who were interested in a part-time job! I was convinced that there might be students who were interested in a live-in part-time job.

That year, we asked a student from Hokkaido University, a student from Tokyo University of Agriculture, and a few of their friends to come and work at the house. At that time, we did not expect them to come as volunteers, and since we had to pay them a solid salary, we could only accept a small number of people due to labor costs.

Living with people I had never met before...that was my biggest worry, but the students who went out of their way to come live in the farmhouse were all hardworking and good people, and I was able to enjoy living and working there despite my confusion.

My in-laws also came to help with housework and babysitting during the busy farming season, so I was able to work to my heart's content.

Also, we no longer had to ask people from the community to come, and only those who said they would come were able to come.

2014 We started accepting students in earnest!

Let's accept more and more students! We decided to do this.

Since it was difficult to pay a full salary to a large number of people, we changed the program to "Volavite" and offered half the salary but free accommodation, meals, and snacks! We decided to change the program to a "volunteer job" and asked many students to come.

When we consulted with a Hokkaido University student who had come the previous year, he himself came to work at every opportunity and introduced us to a total of more than 10 students from Sapporo.

Yes, he was THE well-connected student, even serving as the chairperson of the organizing committee for the Hokkaido University event.

He really worked hard. He was spotted by several people on and off campus asking, "Are you interested in a farm stay? (laugh).

I have never properly asked him why he went that far to help us...but he may have been happy to develop the acceptance that began with his one comment.

And once they came to me, I said, "We're short on people! Is there anyone out there?" and he pleaded with us, and we ended up accepting a total of 15 volunteer workers that year.

The foundation that he, a Hokkaido University student, built, and the connections with Sapporo university students that developed from that foundation, continue to this day.

As you can see, the volunteer work was realized with the great help of one student, but it was also a chance for a large group of people to gather around the table, work, and after a break, go out together for fun.

For those of us who had been feeling a bit lonely living in a farming village where we rarely meet people, meeting and interacting with these students with sparkling eyes was a pure joy.

We were also surprised that those who came stayed at Ezura Farm as a place where they could have a valuable experience, not just a part-time job.

My two-year-old daughter said, "Oniitan! One-tan!" and "Onee-tan! I was also touched by the way my daughter, now 2 years old, was loved and cared for by many students.

Accepting volunteer workers is a good idea!

Of course, it will help solve the labor shortage, but I am sure it will be of even greater value to both of us.

And we seem to have personalities that enjoy accepting people.

A "people-getting farm" that brings lots of people from other parts of the country.

This is what our family will do!

This was the year we were convinced of that.

2015 Launch of the website

This year, the number of people we accepted increased dramatically, and we were able to accept about 50 volunteer workers.

Students from Hokkaido University continued to introduce students to us, and we also had many referrals from people who had come once, but there was a big change that year that helped the Volavate applications.

This was the start of the Farmer's Guest House and the accompanying launch of the farm's website.

We completed the beautiful guest rooms and started allowing the boravites to stay there. We then posted an application for volunteer workers on the website. The website allowed people to see details about the daily work and the rooms, and the number of applicants who looked at the website increased dramatically.

Since then, not only students but also working people have been applying.

They came to us not because they were recommended by others, but because they had done their own research, contacted us, and came to us. This year I strongly felt the weight of the experience that such voluntourism gains here.

After taking a leave of absence from a technical college to stay with us for four months, one of our members dropped out of college to pursue a career in agriculture and started working at a restaurant that has deep ties with farmers.

Three members wrote their graduation theses on their experiences here.

One member said that by experiencing Borabyte before job hunting, he no longer wanted to simply get a job at a big company, and chose a company where he could acquire skills that would enable him to work on his own in the future.

One member said that seeing the beautiful nature and chatting with other volunteers helped him to recover from his addiction to his smartphone! One member said, "I got over my addiction to my smartphone because I enjoyed seeing beautiful nature and chatting with other volunteer workers!"

If I wanted to get paid, I would work at a convenience store in the city.

I came to understand that the people who came all the way here did not want a salary; rather, they were looking for an experience that would be useful in their lives, which could not be replaced by a salary.

Then the next year, we decided to try recruiting people on a completely "volunteer" basis. 2016 Changed to accepting people as volunteers Applications from overseas, dispatched to other farms.

As the guest house at Ezura Farm began to take off, we created an English website in order to accept people from overseas.

This led to a sharp increase in applications for volunteers from overseas. Since there are almost no farms in Japan that accept volunteers and have an English website, we decided to create a website in English.

When people search for "Farmstay" or "Hokkaido," our website comes up at the top of the search results.

It is not that Ezura Farm is good, but rather that there is no other choice, so many foreigners inevitably come to our farm.

In addition, since we could not pay salaries to foreigners without working visas, we decided to change to accepting volunteers, which turned out to be a good decision.

Furthermore, starting this year, we began to have our volunteers work at other farms during the busy farming season.

The farmers to whom we sent them were very happy that they were able to help us, even if it was only for a few days.

We originally started this program with the hope of solving the labor shortage not only at Ezura Farm, but also in the region itself.

We hope that this movement will catch on in the future.

In 2017, the number of applicants exceeded the number of accepted applicants.

The number of visitors to our website has increased, and Ezura Farm is now at the top of the list when searching for "farm volunteer" on the Internet.

Referrals from those who came to us also started to connect naturally.

For the first time that year, we had more applicants than we could accept.

We would love to accept everyone, but given the number of rooms and the nature of the work we do, that is not possible, so we have decided to basically accept people on a first-come, first-served basis.

The day we went around to houses in the community asking people to come work for us was a lie.

However, the increase in the number of applications directly from our website has also presented us with a new challenge, although it is an extravagant one.

Perhaps we have put out too strong an image of "fun" and "agriculture is wonderful" on our website.

Some people who joined the volunteer program to relax in the countryside did not expect the farm work to be so hard, and were confused by the difference from their expectations.

Some asked for shorter working hours, less strenuous work, and other requests that they had never had before.

And for the first time that year, we had one "retiree" who left in the middle of the workday.

Thankfully, for the first time this year, we had more applicants than we could accept.

We would like to accept everyone, but given the number of rooms and the nature of the work we do, that is not possible, so we have decided to basically accept people on a first-come, first-served basis.

The day we went around to houses in the community asking people to come work for us was a lie.

However, the increase in the number of applications directly from our website has also presented us with a new challenge, although it is an extravagant one.

Perhaps we have put out too strong an image of "fun" and "agriculture is wonderful" on our website.

Some people who joined the volunteer program to relax in the countryside did not expect the farm work to be so hard, and were confused by the difference from their expectations.

Some asked for shorter working hours, less strenuous work, and other requests that they had never had before.

And for the first time that year, we had one "retiree" who left in the middle of the workday. 2018 200 people applied, 2 people moved to Engaru Town as a result of volunteering.

2018 was a really happy year for us.

A student who came to volunteer for the first time in 2013 told us that she wanted to work at Ezura Farm as an employee after gaining some working experience. She moved to Shirataki, Engaru-cho and is still working hard as an employee. Another working woman who came twice as a volunteer moved to the farm as a member of the community development cooperative of Engaru Town.

Initially, we started this program to solve the labor shortage at the farm, but it has gone beyond that, and there is now a movement to move to the town.

That year, the number of applicants increased dramatically, exceeding 200 in total.

We made a selection process, but we wanted as many people to come as possible, so we increased the number of applicants and accepted 70 people.

There were two reasons why this was possible.

One was that our volunteer members renovated a room that had been a storage room, and we now have one more room. Another reason was that the girl who moved here as an employee was assigned to supervise the farm work of the volunteers, which reduced my workload.

Having one employee has allowed me to have more mental and physical freedom, which was unthinkable when I was working on the front line and cooking meals, and has allowed me to accept more volunteers.

Also, since we started the selection process, we have had much fewer mismatches and more people have been able to spend quality time with us.

However, we had two retirements again this year.

Next year, we would like to do a better job of pre-selection and care during the stay to prevent retirements, but this may be an issue that inevitably continues....

Above all, it is unfortunate that only 1/3 of the participants were accepted.

Considering that meeting with one person has had so many positive effects on Ezura Farm and the community, I think that if we had accepted more people, something more might have happened....

In 2019, I hope to somehow increase the number of acceptances even more, but I would like to finish this story.

What is important to us when accepting volunteers

I think that the reason for this is that we are able to avoid the cost of labor because they are volunteers.

Or, on the other hand, "It's hard to get them to live in the house,

"It's hard to have them live in the house, so it's better to hire local people even if it costs a lot of money for labor.

We are sometimes told, "Well, it's too much work to have people live in the house.

However, we are not accepting volunteers in order to reduce labor costs.

In fact, considering the cost, it may be better to have veterans work only during the busy farming season when it is necessary, rather than accepting volunteers for the entire season!

The premise is, of course, "to look ahead and solve the labor shortage on the farm," and we expect a lot from them as workers.

Nowadays, volunteer labor is indispensable for farms.

However, the reason we accept volunteers is "to share the value that cannot be replaced by money with as many people as possible.

Therefore, we want to fulfill as much as possible what each volunteer wants to do and experience here.

My husband and I always ask, "Is there anything you would like to do during your stay?" My husband and I always ask them, "Is there anything you want to do during your stay?

I hear that there are not many places where you can freely do so nowadays.

I want them to experience such small wishes as much as possible.

Some of them will say, "I want to make 00!" and sometimes they say, "I want to make a pizza oven.

For example, this is a pizza oven. I always wanted to build one, but I didn't have the time to do so, but one of the volunteers said, "I want to build one! So we left everything to them, from the design to the final product, and they built such a wonderful pizza oven.

The pizza-making experience with this pizza oven has now become a popular activity at the guest house.

Many people are interested in making gardens, and one member, for example, made a "brick path" for us.

Other,

Original T-shirts

Illustrations of Ezura Farm

and many other things that have become a part of Ezura Farm, which the volunteer children have enjoyed and worked on as an experience that they could only have here.

Each person has his or her own values and experiences that cannot be replaced by money, but I believe that it is necessary for us to continue to be a farm that listens to and fulfills those values and experiences in order to have many volunteers come to the farm.

And I feel that the results of our volunteers' challenges connect and spread like a patchwork, making Ezura Farm an attractive farm.

Our farm has been created by our volunteers.

And for us, that is a value that cannot be bought with money.

And if we can get serious with our volunteer members, and get through to them, They naturally tell their friends about their experiences here, rural life, farming, and so on, Their heartfelt stories will spread along with our thoughts and feelings.

The future of Ezura Farm and the local community with volunteers.

Tomorrow, the 2019 volunteers will start arriving.

This year, we have already received more applications than in 2018, so we have decided to boldly accept 7 people for the "beet sowing" program, where we have accepted only 4-5 people so far.

In addition to the main house, we plan to have them stay at the cottage. Since this will be the second year for our employees and I will be able to delegate more to the field than last year, I would like to concentrate on accepting volunteers. We will probably be able to accept more members than last year.

And as always, I hope that each and every one of them will bring back a valuable experience. If I may be so bold, it would be wonderful if even a handful of them would move to Shirataki.

I am even hoping that some of them will move here to work at Ezura Farm, start farming, or open a café or guesthouse... I am sure that this would be a great start.

Of course, this is not an easy task, since we have accepted nearly 300 people so far, and only 2 people have moved here.

But I think it is just a matter of expanding the scope of "inviting people to come" from the farm to the community.

Just as many people came to Ezura Farm, which initially had great difficulty in securing human resources, we would like to have many people come to the community next. I would like to devise and make efforts to achieve this.

From a farm that attracts people to a community that attracts people.

From a farm that attracts people to a community that attracts people.

Just as in the past, with the support and help of many people, we will face new challenges, I am confident that we will be able to make it happen.

2019. I will do my best again this season.

Now, starting tomorrow.











2022.03.06

国土交通省第10回「わが村は美しくー北海道」運動コンクールにて、えづらファームが優秀賞を受賞し、2/24に遠軽町役場にて表彰式をしていただきました。

来年の大賞審査にて、優秀賞の中から大賞が選ばれます。

10年前に多くの方の助けや励ましにより、白滝にて独立。農作業、住込みボランティアたちと向き合い、お客様をおもてなししてきました。そして、それが少しずつ地域活性につながってきているのを感じています。

日々の地道な努力が認められたことは心から嬉しく励みになります。本当にありがとうございました！

【講評】

えづらファームは、人口減少が進み住民が600人を下回る典型的な過疎地域である遠軽町白滝で新規就農し、その時に感じた「農村や農業の魅力、素晴らしさ」を多くの人に感じてもらいたいとの思いが原点となり、生産活動のみにとどまらない幅広い活動を行っています。

畑作経営を基に、地域活性化につながる事業を展開し、「白滝じゃが」の食べ比べセットを全国に発送するほか、加工した冷凍じゃがいもを地元の道の駅の食堂で提供し、「白滝」の特産品のPRに努めています。

さらに、宿泊者と住み込みボランティアで地域の人口とほぼ同じ600人ほどが毎年訪れ、地域住民との交流をしています。この交流を通じて、住み込みボランティアの中には農業や農村が好きになり、新規就農を目指す者や遠軽町へ移住した者もいます。

このように、えづらファームの活動は人・物・情報の交流が促進され、地域の「交流人口」を生み出し、都市と農業の交流のモデルになる優れた活動になっています。一般的に観光資源がないと思われている地域で、地域の魅力を再発見し、多くの人を呼び込む発信力は素晴らしいものがあります。えづらファームの活動は、イベント開催などにみられる派手さはありませんが、新規就農して10年間にわたり、農業の素晴らしさや農村の豊かさを様々な手法で発信し続けています。このことが、既存の農業者の意識改革や若者の取り込みにつながると思います。

今後とも、地域農業と農村の更なる活性化のため、この素晴らしい活動を継続し、質的に充実させて行かれることを期待します。

コンクールの詳細、他受賞団体などはこちら

Ezura Farm won the Excellence Award in the Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism's 10th "Our Village is Beautiful - Hokkaido" Campaign Contest, and the award ceremony was held on February 24 at the Engaru Town Hall.

The Grand Prize will be selected from the Excellence Award winners at the Grand Prize judging next year.

Ten years ago, with the help and encouragement of many people, he started his own business in Shirataki. He has been working on the farm, working with resident volunteers, and entertaining guests. I feel that this has gradually led to the revitalization of the local community. I am truly happy and encouraged that my daily steady efforts have been recognized. Thank you very much!

Critique

Ezura Farm started farming in Shirataki, Engaru Town, a typical depopulated area with a declining population of less than 600 inhabitants.

Based on its field crop management, the company is developing projects to revitalize the local community. In addition to shipping "Shirataki potatoes" eating comparison sets all over Japan, it also offers processed frozen potatoes at a local roadside station cafeteria to promote the local specialty of "Shirataki".

In addition, about 600 people, roughly the same number as the local population, both overnight guests and live-in volunteers, visit the center every year to interact with local residents. Through this exchange, some of the live-in volunteers have come to love agriculture and farming villages, and some have even moved to Engaru Town to start farming.

In this way, the activities of Ezura Farm promote the exchange of people, goods, and information, creating a local "exchange population" and serving as an excellent model for exchange between urban areas and farming communities. In a region generally thought to lack tourism resources, the ability to rediscover the region's charms and communicate them in a way that attracts large numbers of people is remarkable.

Although Ezura Farm's activities are not as spectacular as the events it holds, over the past 10 years since becoming a new farmer, the farm has continued to communicate the wonder of farming and the richness of rural communities through a variety of methods. I believe this will lead to a change in the mindset of existing farmers and attract more young people.

We hope that they will continue this wonderful activity and enhance it qualitatively for the further revitalization of local agriculture and farming communities.

For more information on the competition and other winning organizations, please visit
https://www.hkd.mlit.go.jp/.../nou_sin/ud49g700000emhm.html

コンクール優秀賞を受賞した「えづらファーム」を経営する江面暁人さん（左）、陽子さん夫妻



えづらファームに優秀賞

【遠軽】農山漁村の地域活性化に貢献している団体を表彰する「わが村は美しく」コンクール（北海道）運動第10回コンクール（開発局主催）の優秀賞に、町白滝白支湧別（えづらファーム）が選ばれた。オホーツク管内では唯一の受賞。同ファームを経営する江面暁人さん（42）・陽子さん（41）夫妻は、「（地元の）過疎化が進む中でも、農業などに魅力を感じて年間数百人が来ててくれる。地域が持つ潜在能力をこれからも発信し、人を呼び込んでいきたい」と話している。（佐藤諒）

遠軽で「農家民宿」好調

同コンクールは2001年に始まり、農山漁村の景観や特産品、人々の交流などの創出に貢献した団体を表彰している。今回は全道の75団体が応募し、えづらファームを含む13団体が優秀賞を受賞した。22年度に行われる追加審査の対象となり、特に優れた活動と認められた場合には最高賞の「大賞」が贈られる。江面さん夫妻は09年に東京から北海道に移住。北見や遠軽での研修を経て、12年に第三者的離農地を受け継ぐ形で新規就農した。畑作に携わる一方、15年からは観光客らが短期間の田舎暮らしを楽しめる「農家民宿」を経営。首都圏をターゲットに、農業体験ができる企業研修を受け入れるなど、交流人口の創出に力を注いでいる。実際に、同ファーム滞在を機に町内への移住を決めた人もいる。

2月24日に町役場で表彰式が行われ、網走開発建設部の館石和秋部長が暁人さんに表彰状を手渡した。館石部長は「これまでの北海道の農家のイメージを突き崩してくれた先駆者。これからも新しい風を吹き込んで」と激励。暁さんは「今年はレストランも始める予定。（新型コロナウイルス収束後は）インバウンドなど多くの人に満足してもらえるものを自指す」と意気込んでも語った。

紋別の学校生活 思い出して

商工会議所青年部 ぬいぐるみ贈呈

【紋別】紋別商工会議所青年部は、今春卒業する紋別高級養護学校、紋別高等養護学校の3校計189人に、紋別のキャラクター「紋太」と妹「ベベ」のぬいぐるみセットを贈った。紋別を離れても思い出してほしいを込めた。



町などが小中学生らに送った町産食品の詰め合わせ



地元っ子に滝上の

【滝上】農業関係者だけでなく、わせを発送する町食育・地産地消推進会議と町は2月28日、町内の小中学生らに、うどもに、町内産の小麦粉などの食詰め合はせを発送。感染拡大に伴